



淫習ノ牝贅

若妻孕ませの掟

屋形宗慶

挿絵 / asagiri

立ち読み版

目次

序章	妊孕を悟る瞬間	4
第一章	狙われていた排卵日	6
第二章	オットメオンナの務め	65
第三章	種祝い	123
第四章	窓の向こうの淫欲	191
第五章	濫淫の奇祭	228
継章	淫習の牝贄	284

登場人物

Characters

海野 小春

(うんの こはる)

医者である夫ともに、無医村だった伏隠郷へと引っ越した若妻。結婚二年目。

久坂 祐貴子

(くさか ゆきこ)

海野夫婦の隣人。村の診療所では大志の助手として看護師をつとめている。

久坂 祐奈

(くさか ゆうな)

祐貴子の長女。口数の少ない、おとなしげな美少女。

海野 大志

(うんの たいし)

30歳。医師として伏隠郷の診療所に赴任した。村人から厚い信頼を集めている。

久坂 駿祐

(くさか しゅんすけ)

祐貴子の息子。小柄ながらもやんちゃな、村の子どもたちのガキ大将格の少年。

第一章 狙われていた排卵日

伏隠郷ふかくしじょうという地名はいかにも曰くありげに感じられた。

その集落は、四方を山に囲まれ、陸の孤島というのがこれほど似合う地理もないというような場所にあった。

地名の由来について、平家の落ち武者が正体を伏して隠れ住んでいたからではないかなどと勘ぐる者もいるが、実際は本来の地名「富隠」が変化したものだという。

かつて集落の背後に聳そびえる山からは金が採れたが、それを隠して慎ましく暮らしていたから「富を隠す」フガクシという名になったという。やがて、「富を隠す」では富があることを喧伝しているようなものだとして、「伏隠」に改めたのだと伝わる。

山間を流れる川の流れに沿い、ちやうど胃袋のような形に開けた僅かな平地。そこに五〇戸ほどの民家が点在する。茅葺かやぶき屋根の古民家も残る隔世感のある風情だ。

たった一つ、外部と繋がる道路は林道を舗装したような険しく細いもので、冬期には雪で通行不能になることもしばしばある。この道を使って最も近いコンビニエンスストアまでは、雪のない時期なら車で一時間強とたったところだ。

そんな僻地であるから、生活必需品を扱う小さな商店もありはするが、少なくとも食料については自給自足の比率が高い。幸いにして、村に電力を供給する小規模な水力発電が可能な水源に恵まれ、農・林業が大半、畜産と漁業が少々といった具合で集落内の食糧事情をまかなっていた。

集落には小中学校を兼ねた分校が一枚。一見限界集落のようであるが、五〇戸が大半三世帯、四世帯同居といった具合で人口は思い掛けず多い。老人だけというような家を除けば、集落の三分の二の世帯に小学生か中学生の子供が一人か二人はいるといった具合だ。未就学の児童も含めればその数はさらに増える。

孤立集落というの言い過ぎでないこの伏隠郷にも、極めて稀ながら村の外からやってくる新たな住人となる者がある。伏隠郷に移り住んでもうすぐ一年になる海野夫婦がその例だ。

若い夫婦のうち、妻の小春こはるは伏隠郷の都会とは別世界の和んだ空気を本当に気に入っていた。

人々は気忙しくなく大らか、気さくで、子供達はみんな元氣溼刺はつらつとして明るい。集落の人間が皆家族のようで、誰かが病気で寝込もうものならば、看病はもちろん家事から仕事までを集落の全員で世話するような面倒見のよさである。

このような集落であるから、「村社会は排他的で余所者を受け入れない」というようなこともなかった。

引越してきたその日などは半ばお祭り騒ぎで、歓迎の印しにと夫婦二人では食べきれない量の米から野菜から様々なものを携えて、人々が訪ねてきたものだ。

この、夫婦一組ばかりの移住にも集落挙げての大歓迎をするような僻地に、海野夫妻が移り住んできた理由。それは小春の夫、大志たいしが村の診療所に医師として着任することになったためだった。

きっかけこそ無医村となつてしまった伏隠郷からの依頼に端を發した移住だったが、小春にとっては、憧れであつた田舎暮らしが実現する機会に思いがけず恵まれた形である。

伏隠郷からの診療所赴任の依頼が、大志が再就職先を探していたときだったのも幸いだった。それまで勤務していた大病院を退職した後、再就職先探しが難航していたところへの依頼はまさに渡りに船であつた。

そうして移り住んできてから、あと半月ほどで丸一年を迎える。

細い峠道を越え、山間に初めて伏隠郷を目にしたときの感動を思い出すような、錦秋の山々に抱かれた里が小春の目の前に広がっていた。

「ああ、綺麗……!!」

山を見渡せば、傾いた日差しに照らされてより鮮やかに映える一面の紅葉。実りの季節、小春は趣味と実益を兼ねた畑で、野良仕事をしていたことも忘れて荘厳さすら感じる景色に見とれていた。

若妻だった。歳は二十三、結婚二年目でまだ人妻としては初々しさが見え隠れする。背丈は中背といったようなものか。ほんのりと紅茶色の溶け込んだ髪の毛先が腰ほどまであるのが印象的だ。

肩や胴回りは細い割に、胸や下半身の張り出しは大きく、女体のシルエットはアンバランスさを感じるほどにグラマラスだった。

健康的でありながら扇情的な体付きの反面、顔立ちはというと多少童顔気味か。やや丸みのある瓜実型のフェイスラインと、ほんの少し垂れ気味の目尻を持つ目が、和風な美人といった印象を見る者に与える。

「小春さーん」

まさに心ここにあらずといった具合に景色を眺めていた小春を呼ぶ声があった。

大志が診療所の医師として着任中、住宅として無償で提供されている古民家の裏手に畑はある。今は海野宅となつている古民家の隣には、まだ新築から数年といったと

ころであらう現代的な住宅があり、今そちらから手を振って小春を呼んでいる長身で黒縁眼鏡の女性である。

「祐貴子さんおかえりなさい」

畑から直接隣家へ向かい、畑と隣家の境界辺りまで出てきている祐貴子と呼ばれた女性に歩み寄る。

久坂祐貴子は隣人であり、大志の着任した診療所唯一の看護婦、そして同時に小春と大志が現在居住している古民家の大家でもあった。

診療所は平日なら午前は昼十二時までが診療時間。午後は二時から五時まで。先ほどまで紅葉の山々を赤く照らしていた太陽は山陰に隠れ、薄暗さが伏隠郷に広がり始めていた。

「日も短くなって……もうそろそろ昼でも長袖じゃないと肌寒いわねえ」

そう言って彼女は二の腕を擦って暖めるように撫でる。

手のひらを二の腕にやれば、自然と腕が胸を持ち上げるような格好になる。すると夏物のカットソーに覆われたバストは、持ち上げた腕にたふんと乗ってそれを隠してしまう。その状態で腕を動かすと、柔らかな乳房はぶるんぶるんと気持ちいいほどに揺れて見せた。

「私、今日は半袖でもよかったかなって……今ちょっと汗掻いてるくらいですよ？」
「そりゃあ、小春さんは若いですよ」

直接歳を聞いたことはないが、彼女が大志の歳を聞いたときには自分より少し年下だと言っていたし、彼女の子供の年齢を考えれば三〇代中頃、想像より上としても四十前辺りといったところだろう。

祐貴子の顔立ちだけ見ると、やや細く切れ長な目元がきつそうな性格を想像させる。だが実際には非常に社交的で、気遣いが細やかで上品な女性だった。

小春以上に長い髪は黒く艶々としていて、うねった波を思わせるウェービーなスタイルにヘアメイクされている。だいぶ長身であることも手伝って、波打つロングヘアが様になっていた。

海野夫婦が引越しの段取りのため古民家を見に来た際、大家である彼女と初めて対面したときには、背が高くしかもグラマラスで、女優だと言ってもおそらくは疑われないであろうほど凄艶な美貌に夫婦揃って息を呑んだものだ。

「私が祐貴子さんくらいになったとき、そんなに若々しくいられる自信ないですよ」
「あらあ、お上手ねえ。ありがとうございます」

小春と祐貴子が並ぶと、頭一つほど高い祐貴子の背丈が強調される。二人とも間

違いなく美人と言っているが、小春は清楚でさっぱりとした和風の、祐貴子は華やかで艶めかしい洋風の、といったように美人と言ってもだいたい雰囲気の違いが際立った。「ああ、それより用件ね。先生ですけれど、先生は川上のお婆ちゃんの様子を見てから帰るから少し遅くなるということでした」

「川上のお婆ちゃん、最近また体調が悪いとか」

「そうなんですよ。お婆ちゃん一人暮らしでしょう？ 先生、特に気に掛けてらっしゃるから」

僻地にもかかわらず義務教育世代が多く、三世帯、家によっては四世帯も珍しくない伏隠では、逆に老人の一人暮らしのほうに珍らしい。住人同士の互助精神が非常に強い集落であるから、独居老人の面倒見もいい。様子見も強いて医者である大志が足を運ぶ必要はないのであるが、それでも気に掛かる住人のところへは自ら出向くのが、大志が伏隠の人々に厚い信頼を寄せられている所以だろう。

「ただいまー！ 腹減ったー！」

小春と祐貴子がそんなやりとりをしていると、大きなサッシが開け放たれている久坂邸のリビングから、元気のよさそうな少年の声が筒抜けで聞こえてきた。

「あら、駿祐も帰ってきた」

などと言っている間にドタドタと宅内に駆け込む足音が聞こえ、そしてすぐに足音の主がリビングから姿を見せた。

「あつ、小春姉ちゃん！」

「駿祐、まず先にこんにちは、でしょ。ちゃんと御挨拶しなさい」

「へーい。こんちわ、小春姉ちゃん」

ピシッと祐貴子に窘められて、^レはいはいわかりました^ク というように肩を竦めながら改めて小春に挨拶した少年が、祐貴子の息子、駿祐。

それほど体格は大きくないながら、伏隠の住人なら名前を聞けば「あのガキ大将か」と顔が浮かぶちよつとした有名人だ。とにかく外で遊び回っているせいか、顔も手足もだいぶ色濃く日焼けしている。そういう髪質なのか、逆立ったような短い髪がトレードマークだった。

「母ちゃん、今ケイジとソウタも一緒に来た。今日泊まるってさ」

「あら、お父さん達には言ってきたのかしら？」

「わかんね」

母子のやりとりを傍らで聞きながら、小春は伏隠郷に、久坂家の隣に引越してきてからずっと気に掛かっていることが今改めて胸の中で引つ掛かり、祐貴子の横顔を

見ながら考えを巡らせていた。

ケイジとソウタは、それぞれ駿祐から一つ、二つ年下の少年達であった。初めは駿祐の友達だろうと思ってみていたのだが、二人とも祐貴子を「お母さん」「母ちゃん」と呼ぶのだ。この二人だけではない、他にも彼女を母と呼んでいる未就学児からの子供達がいるのを目にした。

（この村だと、別に血が繋がっていなくてもお母さんと呼んでも不思議じゃない気がするし……）

と、考えてもみるのだが、まずその考えは外れているだろうと思わせるもう一つの事案がある。それは、時折目にするある光景のことだ。

日時は不特定だが、特定の男達が久坂家に入出入りするのだ。そして往々にして、その特定の男達が入り出す際には子供を連れてくる。彼女を母と呼ぶ子供を。

（やっぱり、そういうこと、なんだろうけど……）

他人の家庭の事情を詮索するつもりはないので祐貴子やその子供達にも聞いたことはないが、おそらくは彼女を母と呼ぶ子供達は、祐貴子が産んだ子供なのだろう。そして、久坂家に入出入りする特定の男達は、それぞれの子供の父親達……。

ほぼ確信的なものを胸に抱きながらも、この瀟洒しょうしゃな美女が複数の男達を取っ替え引

つ替えしているような不埒な人物とは思えず、小春は長らく困惑を胸の内に秘めていた。

「お母さん……私……いつてくるから……」

「ああ、祐奈ゆうな、いつてらっしゃい。帰りは送ってもらいなさいね」

「うん……」

騒がしい駿祐とは対照的に、影が寄るように音もなく縁側に姿を見せた少女。久坂家の長女、祐奈は、口数少なく祐貴子と言葉を交わすと、母の傍らにいた小春に小さく会釈をしてリビングに姿を消した。

ここに移住して来て以来今まで、祐貴子の夫という人物を見たことはない。だが彼女は駿祐と、その姉の祐奈という二人の子供を育てている。この二人の父親もそれぞれに違うのだろうか、小春は悪いと思いつつも勘ぐらずにはいられなかった。

「どうかしました？ 小春さん？」

「あ、い、いいえ……祐奈ちゃん時々この時間に出かけるのを見るので、いつもどこにいくんだらうなど思っていたんです」

勘ぐってしまったっている内心が顔にでも出ていたのだろうか。祐貴子に顔を覗き込まれて、小春は取り繕うように思いついたことを口から出して返す。

「ああ……うふふ、あの子、あれでけっこうモテるんですよ？」

「えっ!？」

「ふふふ、意外でしょう？」

「いいえ、そんなことないですよ、かわいいですし全然不思議じゃありません」

などと間を置かず返したが、実際、祐奈は素地は相当な美少女だと小春も思っていた。だがいかんせん顔を隠すように伏し目がちな仕草や、無造作な三つ編みのおさげなど、せつかくのいい素材がもつたいないような地味な出で立ちだ。

それに加えて酷く無口で、笑ったところはおろか泣いたり怒ったり驚いたりといった表情の変化を見ることがない。とても、異性にモテて、学校から帰って来るなりデートに飛んで出て行くような娘には見えないというのが正直なところだった。

玄関の外で、自転車が止まり、スタンドが立てられるガシヨンという音がした。

「ただいま」

祐貴子とのささやかな井戸端会議を終え、大志の帰宅に備えて夕食の支度を大方済ませたいいいタイミングだった。帰宅を知らせる声が台所にいた小春の耳にも届き、若妻は玄関へ夫を出迎えに出る。

「おかえりなさい。川上のお婆ちゃんの様子はどうだったんですか？」

「うん、ちよつと風邪気味かな。最近朝晩冷えてきたからね」

白衣姿のまま帰ってきた大志は、背中に回った小春に手伝われて白衣を脱ぎながら言葉を返す。

白衣を脱いだ大志は中肉中背ながら比較的がっしりとした体付きだった。高校に入るまでは野球漬けだったからだろうか。美男子といえるほどではないが、半ば閉じているようにすら見える優しそうな細い目が印象的な好感の持てる顔立ちだ。

「大志さんも気をつけてね。医者の不養生なんて笑われますよ」

「大丈夫じゃないかな。小春が管理してくれるから」

「もう……」

結婚二年目であるが、まだまだ初々しさが抜けない夫婦であった。

海野夫婦にまだ子はない。二人とも望んではいるものの、できないのだ。不妊治療とまではいかないものの子を受かるようにと様々試しては来たものの、結婚二年目を迎えてなお子供はできずにいた。

大志は医師であるし、小春は医学的に妊娠確率が上がるなにかしらの方法を用いることを提案したこともある。しかし大志は、普通の人よりも医者として命をより深く

考える身ゆえだろうか、できることなら自然に子を成したいと強く望み、以降は夫婦で、頑張つて、子作りをしているといった具合だった。

「御飯、できてますから。食べましよう？」

「うん。川上さんのところまで自転車を飛ばしたら腹が減つたよ」

「これ、洗濯機に入れてくるから先に座つて……」

大志が脱いだ白衣を洗濯機に入れてこようと脱衣所へ向かおうとしたそのときだった。

「こんばんは」

ガラガラと年季の入った引き戸を半分ほど開けて、祐貴子が窺うようにして顔を見せた。

「あ、祐貴子さん。こんばんは、どうしたんです？」

「ええ、先生が帰つてらっしゃつたみたいだから。お二人に少しお話があつて」

「話ですか？　じゃあ、立ち話もなんですし、中へどうぞ久坂さん」

「いいええ、時間は取らせませんからここで」

大志の勧めに恐縮そうな声で返しながら手をひらひらと振る祐貴子は、玄関の中に入つて引き戸を閉めると、早々に話を切り出した。

「回覧板も回って来ると思いますが、十三日、お祭りがあるの」

「十三日ですか？」

「そう。ちょうどお二人が村に来て一年目ね」

「へえ。私達、お祭り日に引越してきてたんですね」

「違うの。先生と小春さんが村に来た日だからお祭りなんですよ」

祐貴子の言葉に、大志と小春は顔を見合わせる。人が引越してきたからお祭りになるなど聞いたこともなかった。

「私も伏隠に移ってきて一年経ったときやったの。村に外から人が移り住んできて、一年定住して根を下ろしたら、山の社で新しい住人を神様によろしくお願いしますっていうお祭りするんですよ」

「そんなお祭りがあるんですね……」

「このお祭りはお二人がいないと始まらないようなものですから、ぜひ参加して欲しいのですけれど。いかがかしら」

祐貴子が夫婦の顔を交互に見やると、小春と大志はどちらからもなく顔を見合わせる。そして、言葉を交わすこともなく揃って祐貴子に視線を戻すと、小春はやや童顔なその顔に人なつこい笑みを浮かべて応えた。

「もちろん参加させてもらいます。私達を本当に伏隠の住人として迎えてくれるお祭りなんて、私、凄く嬉しいです」

「僕も、診療所が終わってからになりますけど必ず参加させてもらいます」

夫婦の返答を聞くと、祐貴子はこの上なく嬉しそうに手を一つ打ち鳴らした。

「私も嬉しいわぁ！ お二人は別段準備とかはいりませんから。当日まで体調を崩したりしないように気をつけて。なんといいってもお祭りのメインなんですから」

「はい。わかった？ 大志さん？」

「ははは、十分気をつけるよ」

もとより伏隠郷の行事への参加には常に前向きだった海野夫婦である。その答えは当人達にとつては当然のものであつた。

半月など瞬く間で、祭りの当日はすぐに来た。

その日の診療を終えた大志と祐貴子が診療所から帰宅すると、普段着ながらしつかりと身嗜みを整えた海野夫妻は祐貴子に連れられて山の社へと向かつていた。

伏隠の人々の間で信仰されている山の神を祀った社は、伏隠郷を囲む山の麓にある。麓とは言つても、緩やかながら百段ほどの石段を登った先だ。

紅葉に染まる木々に囲まれた石段の左右には提灯が飾りつけられ、夕暮れの中でぼんやりと光る提灯の列は異世界へでも続いているかのような雰囲気を出していた。石段を登りきると、垂直に切り立った岩壁が視界一杯に飛び込む。岩壁の前にかなり古いと見える社があり、社を中心とした境内には石段と同じく提灯が飾られ、その灯りに照らされる中で伏隠の男達が酒盛りの真っ最中だった。境内には大人だけではなく子供達も多くおり、思い思いに遊び回って甲高い声を上げていた。

「皆さん、主賓の御到着ですよ」

祐貴子が周囲に声を掛けて注目を集めるや、拍手混じりに歓声が上がった。

「先生よく来たよ来た、まあまあ座って一杯！ 一杯！」

「奥さんもほらほら」

と、もはや半分出来上がった男達は酒盛りの環に夫婦を入れようと揃いも揃って手招きする。

「いいですねえ、花見以外にこういった感じで飲んだことないんですよ僕」

「ちよつと、大志さん……」

大志は酒盛りに誘われて目に見えて喜んでいった。というのも、大志は無類の酒好きだった。大酒飲みでも酒乱でもないが、大の酒好き。そのくせでんで弱い。ビールな

ら缶二本開けたときには寝ている有り様だ。

そんな大志が酒盛りに加わっていきなり寝てしまうのを危惧して小春は夫の袖をチヨンチヨンと引つ張つて制した。

「ちよつと皆さん？ 祝詞もあげる前から飲み過ぎじゃありません？」

「だーいじょーぶだつて、ちやーんと神様の前では礼儀正しくすつから」

困った顔で窘める祐貴子に、酒盛りの男達は祐貴子ちゃんも一緒に飲もうなどとまるで悪びれない。

「本当に困つた人たちねえ……小春さん、先生、神事があるからまずはお社に」

「は、はい。すいません、後で……」

酒盛りに誘う人々に頭を下げながら、大志は酒盛りに後ろ髪引かれるようにしながら社へと進む。

社は集落の大きさに見合つたというべきか、こぢんまりとしたものだ。しかし風格のある年季を感じる佇まいが、実際の大きさ以上に存在感を発している。

社の三面の板戸は全て取り払われ、能舞台のようにも見える。中は十畳ほどの広さで板張り。社の奥には御神体が祀られておらず、代わりに時代劇で見るような奉行所の門を一間の幅に縮小したような観音開きの扉があつた。

社の中、右手には老婆が四人並んで座り、対面するように左手には老翁が四人座っている。小さな集落であるから、小春も名前と顔を知っている老人達だった。

「先生、奥さん、よく来たねえ」

八人の老人は、祐貴子に連れられた夫妻が社に上がるとにこりと笑って頭を下げる。「どうも、こんにちは。川上さん、具合はどうですか」

老婆の一人は、大志が気に掛ける川上のお婆ちゃんであった。こんな場でも医者であることが抜けず、体調を気遣う夫が小春はとても好ましかつた。

「ええ、おかげさまでねえ、すっかりよくなりましたよ」

老婆は抜けたところのある歯を覗かせながら大きく笑みを作り、こくこくと頷いて大志に返す。

「お二人はここでお待ちになって。私は神事の支度があるから少し失礼するわね」

祐貴子はそう言つて一人、社奥の扉を体を通して滑り込めようように消えていくと、海野夫婦は祐貴子が示した座布団に、社の奥に向く形で座った。

祭りの主役である海野夫婦が揃ったからだろう。それまではそれこそお祭り騒ぎだったものが、いつかしたら大人達は一様に社に向き直り、酒盛りもやめて静まりかえっていた。どうしても落ち着かない子供達はそんな中でも声を上げたりなどしていたが、

お祭りから神事へと場が変わったことを厳肅な空気が小春に知らせた。

「ん、ん、それじゃ、そろそろ始めようかね」

四人の老婆の内の一人が、時を見計らってか神事の始まりを告げた。

上座に座る老翁が祝詞をあげ始め、海野夫妻は伏隠の住人達に倣い、祝詞が奏上されている間、深く頭を垂れる。朗々とした祝詞が終わると、周囲に合わせて海野夫妻もまた頭を上げた。

すると、老婆のうちの二人が社の奥へ行き、それまで閉じられていた社の奥の扉を開け放つ。開かれた扉の中には、岩壁に開いた洞穴の入り口があった。

入り口とはいっても、それは岩壁に入った大きな亀裂と言ったほうがいい。人一人、身を縮こまらせて通れるほどの穴だが、その形が問題だ。

（あの岩の穴の形、まるでアソコみたい……クリトリスからビラビラしたところまで、なんて生々しい……岩を彫って作ったのかしら……）

小春がそう思うほど、亀裂は彫刻のように女性器に酷似している。色でも塗れば相当生々しく見えるだろうと思えた。

老婆らが扉を開き、女陰のような洞穴の入り口が姿を現すと、老翁が太鼓を打ち鳴らす。それを合図に、先ほど支度があるからと姿を消した祐貴子が洞穴の奥から姿を

現した。

「ゆ、祐貴子さん……!?!」

小春は思わず大きな声を出してしまっていた。

「シー……」

祐貴子は立てた人差し指を唇にあてて静かにと促す。そして、手にした神楽鈴をシヤリシヤリと鳴らしながら社の中央へと進み、海野夫婦と対面する形で正座した。その格好はといえば、乳頭の形、大輪で膨らみの大きな乳輪の色まで透けるほどの薄衣一枚を纏い、白い肌に一際映える朱色の紅を唇に引いた妖艶で扇情的な姿だった。

「大志さん、見ちゃダメっ」

小春自身、扇情的な祐貴子の姿から目を逸らしながら、夫にもそうするよう促す。

「す、すいませんっ」

思わず目が釘付けになってしまっていた大志は、妻に促されてハッと目を逸らした。朴念仁とは言わないが、生真面目な大志が見入るほど、祐貴子の薄衣に透ける裸体は美しく、淫靡であった。

「あら、いいんですよ？ 神事ですもの、お気になさらないで」

祐貴子は妖艶さを倍増させるような、蛇の鱗がぬめるように艶めく笑みを浮かべ、

老婆が彼女の傍らに据えた三方を手にして夫妻に少し寄り、三方に乗った杯をまず大志に差し出した。

「さ、御神酒を」

「これはどうも……いただきます」

「うふふ……先生はお好きですものね、ちよつと多めに差し上げますね」

杯を受けた大志は、杯にほとんどのなみなみといった具合に注がれた御神酒に目を輝かせた。そしてそれを、一気に呷る。

「っ、かぁー……」

さも美味そうに飲み干す夫を、小春ははらはらしながら横に見ていた。缶ビール二本でコテンと寝てしまう人だ。日本酒など杯一杯でバタリと倒れてしまうのではないかと。

「じゃあ、次は小春さんね」

三方からもう一つの杯を取り、祐貴子は小春に差し出す。受け渡された杯に、濁酒が注がれる。大志に比べたらずつと少ない。本当に口に一含みといった量だ。

（私も飲めないんだけど……）

大志ほど極端ではないが、小春も酒には弱かった。とはいえ、一口ばかりの量であ

ればさすがに大丈夫だろうと一気に飲み干す。

「あらあ、いい飲みっぷり」

「い、いえ、私飲めないもので……」

杯を祐貴子に返し、小春は大きく溜息を吐く。もうすでに胃から湧くような酒の香りが溜息とともに出て小春は顔を顰めた。

「もう少しで終わりますから」

祐貴子は三方を老人の一人に下げ渡すと、改めて社の中央に座り、姿勢を正した。すると八人の老人はそれぞれに太鼓や笛を持ち、おもむろに拍子を取り始める。

すつと衣擦れの音もなく立ち上がった祐貴子は、胸が透けて見えるのはもちろん、全身のボディライン、果ては下半身の濃密な黒い叢までも見て取れた。

薄衣の妖艶な美女は、神楽鈴を手に、老人達の奏でる囃子に合わせて海野夫妻の前で舞い始める。

長身で豊満な女体は、舞の一挙動ごとに猥褻な肉の動きを見せ、特に横の動きに対して揃ってブルンと大きく揺れる著しい豊乳は、小春でさえ思わず目を引かれるほどのものだった。

大きく動きたびに、ムチィッと肉質の柔らかさを見せつける大きな尻もよく肉が震

え、ビシリと平手打ちでも食らわせれば気持ちよく厚い尻肉が波打つてであろうことを想像させる。

時折、神楽鈴を手にした腕を高く掲げる瞬間、祐貴子の腋の下には黒く濃く繁ったものが見えた。普段生活していて隣人の腋を見る機会などなく気付かなかつたが、あの美しい人がこのような黒々と伸びた腋毛を隠していたかと思うと、小春は驚きを隠せず思わず目を見開いてしまっていた。

(笑った……)

そんな彼女と目が合った祐貴子は、小春に艶めかしい笑みを向けた。そして、これ見よがしにわざと腕を上げ、両腋をさらけ出して見せた。

そればかりではない。まるでストリップのように腰をくねらせ、巨尻を揺らし、夫妻に向けて股を広げてまで見せる。

(いったい、これはなんなの……)

先ほど叫びつた御神酒のせいだろうか。小春の体は酷く火照り、喉には渴きを感じていた。自分以上に酒に弱い夫は大丈夫だろうかと横に座る大志に目を向けると、彼は食い入るように祐貴子の妖艶な——いや、もはや猥褻といえる舞を見詰めていた。その股間では、男のものが屹立して、ズボンの前部分を押し上げていた。

「た、大志さん、ちょっと、うっ……」

傍らの夫に手を伸ばして注意を促そうとした瞬間。それまでも酩酊に似た感覚で彼女を苛んでいたものが、眩暈として形を表した。ぐるりと世界が回り、その瞬間自分が上を向いているのか下を向いているのかもわからなくなった。そして、体が社の板の間に倒れ伏すときの衝撃を最後に、小春の意識は途切れた。

小春自身には、すぐに目を覚ましたように感じられた。

体にひんやりとした空気が触れている。冷房や夜風の冷たさではない、都会育ちの彼女がこれまでほとんど体感したことのない空気だった。

うっすらと目が開く。まるで遊園地のコーヒーカップに乗った後のぐるぐると目が回った余韻のようなものに襲われる。

世界が回っているのか自分が回っているのかわからないような視界の中に、いくつもの揺れる光りが見える。ぼうつとしながらもその光りがなにか見詰めていると、やがてそれが蝋燭の揺れる火だと気付く。

蝋燭の灯りに照らされる岩肌。ドーム状の、車なら二台は入れそうな広さの岩室か石窟らしき空間にいるのだとはわかった。だが、いったいここがどこなのか、まだ頭

の芯が痺れているような感覚のある中では思考が巡らなかつた。

「ああ、目が覚めたのね。おはよう、小春さん。ちよつと、御神酒が効き過ぎたみたいね。大丈夫？」

風呂場にいるような反響を伴った声が耳を刺激する。

「おは、よう、ございます……祐貴子、さん……？」

朝に蠟燭？ 自分の寢覚めになぜ祐貴子が現れた？

徐々に澱んでいた思考が形を持ち始めた小春は、ある一瞬にハッと我に返る。社で祐貴子の猥褻な舞を見ているときになにが起こったのかと。

「祐貴子さん、私、眩暈がして……」

「小春姉ちゃん起きたんだ！」

「駿祐君……？ 祐奈ちゃんもいるの……？」

目が回るような感覚が薄れていく。そんな中で、少しずつ目に映り始める祐貴子と駿祐、そして祐奈。だんだんとその姿がはっきりしてくると、小春は不自然さを感じた。首から下も肌色、胸から下も、腰から下も、肌色、肌色……。

「なんで裸……」

思わず顔を手で覆おうとした瞬間、小春は己の体が自由を奪われていることに気付

いた。

「いやあッ?! な、なにっ、なんでっ?!」

横たわってはいるが、背中に布団かクッションのようなものを当てられ上体が起きている。両手はまとめて、両足は左右それぞれに頭より上に持ち上げられ、角材で作られた陸上競技で使うハードルのような形のものにタオルで繋ぎ止められていた。久坂母子と同じく、全裸でだ。背中を丸めるように頭を起こす形になっているせいで、自らのヘソか股間を覗き込むような格好になっている。

「ッ?! 大志さん!」

自らの状態を把握するのに視線を動かしているうち、傍らに大志もやはり全裸で拘束されている姿を見つける。

酒が弱く、しかも御神酒をより多く飲んでいる夫が、自分より深く昏睡しているのは明らかだった。

大志は四肢を伸ばしたX字の状態で、両手首、両足首をやはりタオルで角材に縛りつけられて自由を封じられていた。彼の股間では、勃起したペニスが時折ビクンと脈打っている。

さらには自分と夫を取り囲むように三脚に据えられたビデオカメラが並び、無機質

なレンズがジッと夫婦の姿を見詰めていた。

「なんなの……これ……」

「見るだけで触っちゃダメって母ちゃんが言うから、オレ超我慢してたんだぜ！」

真正面から彼女を見下ろす駿祐が目を輝かせている。小春は両足を広げて拘束されているために、隠しようのない女の守秘部分を少年にさらけ出していた。

「い、いやっ、見ちゃダメっ、駿祐君、見ないで！」

拘束された身で体を藻掻かせるも、まるで意味はない。駿祐の目からすれば、むしろ腰を揺すっているために扇情的な動きに見えてしまう。

「そんなこと言ったって、小春姉ちゃんがその格好になってからもう一時間くらい見てるし」

「え、え、えええ……?」

消え入りそうな声が細々と出た。一時間も、意識のない間視姦され続けていたのだろうか。自分より一回りも年下であろう少年に、大志以外には見せたことのない体の全てを隅々まで観察されていたのだろうか。そんな想像が頭をよぎると、たまらず小春の目から涙が溢れて出た。羞恥とおぞましさが涙を押し出してくるのだ。

「ああああ……母ちゃん、姉ちゃん泣いちゃったぜ……?」

まるでぐずった子供に困り果てたかのような口振りで、駿祐は頭を掻く。

「しかたないでしょう……最初はしかたないのよ。お母さんだって、そうだったんですもの」

「ふうん……」

今ひとつ理解していない様子の駿祐を前に、祐貴子は一瞬哀れむような表情を見せる。しかしすぐにいつもの妖艶で瀟洒な笑みを戻し、我が子二人の肩を抱いて小春の前に立った。

「小春さん。きつと今、とても混乱してるんでしょね」

「あたりまえです……なんなんですか、いったい……なんなんですか……祐貴子さん、なんでこんなことするんですか……」

涙をこぼしながら、祐貴子にすぎるような視線を向ける。そんな小春を、祐貴子は笑ってはいるがその感情が読み取れない顔で見下ろす。

「社の中からオマ○コにそっくりの、岩戸〴〵を見たでしょう？ ここはその奥、社の本殿……いいえ、ここが御神体そのものね。伏隠の人たちは、山神の子袋〴〵と呼んでいるわ」

「……わけがわからないです……とにかく私達をここから出してください！」

「それはできないのよ。オムカエを済ませずにここを出たなら、私はお二人の生活を保証しかねるわ」

祐貴子は拘束された小春と大志の間に身を置き、腰を下ろした。見れば、石竈の床には広く布団が敷かれていて、どこにどう寝ても石竈の冷たい床に肌を触れずに済むようにされていた。

「オムカエの儀を進めながら、ちよつと昔話をしましょうか。駿祐もういいわよ、よく我慢したわね」

そう母が許しを出すと、駿祐は大きく開いた目を輝かばかりにして満面の笑みを見せた。

「いやったー！」

「ちゃんと手順通りにしなさいね。儀式なんだから」

「わかってるって！」

喜び勇む駿祐は、あられもない姿で拘束された小春の前に飛び込むようにして座ると、するつと彼女の内股に手を触れた。

「ひっ……！！ 触らないでっ！」

たまらずぞわりと鳥肌を立て、小春は喉を反らせて頭を振り、嫌悪を露わにする。

「頭に入らないかもしれないけど聞いてくださいね、小春さん。あなた達夫婦がなぜこんな目に遭うのかという理由と、これからあなたと先生に求められること。どちらも大事なことですから」

祐貴子は黒縁眼鏡に蝋燭の灯りを反射させながら、少年に愛撫されて嫌悪に悶える若妻に語る。

「伏隠は知つての通り陸の孤島。現代ですらこうだもの、車が通れる道路が整備されるまでは、本当にこの『村』という隔絶された世界で人々は暮らしていたの」

祐貴子が言葉を重ねる傍ら、駿祐は小春の白く柔らかな肌を少し汗ばんだ手のひらで撫で回す。内腿から始まり、ふくらはぎ脹脛から足の裏まで。そこから来た道を遡って内腿に戻り、女体を上つてなだらかかほどよく引き締まった腹部へ。

「んいいいッ！ いやああああ……ッ！」

唇を噛み、童顔の美貌を歪め、眉間には深く皺を刻んで悶える。小春は全身に不快感を表しながら、少年の愛撫に蹂躪されていた。

「何代も何代も、この小さな隠れ里の中だけで繰り返される婚姻で、もとより僅かだった住人は例外なく近親になってしまった。そうしてあまりに濃くなりすぎた血は虚弱や早世といった様々な害を村におよぼしたの。気が付けばただでさえ少なかった住

人はさらに減り、大昔の伏隠の人達も気付いたのね、近親婚がその害の元凶だと」

淡々とした口調で、まさに昔話の語り部のようにして伏隠の歴史を小春に聞かせる祐貴子。しかし小春はそれに聞き入る余裕などなかった。

「小春姉ちゃんの巨乳もつちもちで気持ちいい♡」

駿祐の手はいよいよ小春の胸に到達し、秀麗な単独峰のように形よい乳房を、手のひら、指の全てを使って揉みしだいていた。

乳房の形よさを保つ要因である胸の張りは著しく、乳肉を握る駿祐の指が柔らかさの中に弾力を感じるほどだった。

「初めは住人を単純に増やしながら村に外の血を入れるために、山に入った男や女を見つけては攫^{さら}ったそうよ。〆神隠しに遭^あうと噂されて山に入る者がなくなつてからは、他の村から身売りされた娘や、奉公に出されるはずだった次男、三男を買つて村に連れてきた。時代が変わつて身売りという伏隠にとつて都合のいいものもなくなるよ、嫁として村の外から〆オムカエ^えした女を村の男達で共有して、たくさんの子を産んでもらうことにした……」

少年に豊乳を揉みしただかれ嫌悪に喘ぐ小春を見やり、祐貴子は見る者がゾツとしてしまいそうなほど、凄艶さの中に狂気を滲ませた微笑みを浮かべる。そして、若妻の

耳元に唇を寄せた。

「それが、オットメオンナ。子を作る務めを担う女。私であり、これから、オムカエの儀式を受けてあなたが成るものよ」

耳元に吹き込むようにして語られた言葉に、小春はまさしく身の毛をよだたせた。

「ひ……ッ!! 祐貴子さんどうしてしまったんですか!! なにかの冗談なんですか!! そんな、そんな狂ったことありえない……!」

「そうね、狂っているかもしれないわね」

ふっ、と小春もよく知る上品だが嫌味のない美しい微笑みが祐貴子に戻った。

「でも、あなたも、あなたのご主人も、狂うのよ」

それも一瞬。微笑みは、能面のようにとも言えるような人ならざる無機質な笑みに質を変え、蛇の如くぬめるような動きで、傍らで大の字に拘束された小春の夫に体を絡みつかせた。

「小春さん、今日が排卵日ね？」

「……えっ？」

思いがけない言葉だった。その単語もそうだが、なぜ自分の重要な体調に関することを彼女が知っているのか。言い当てられたことへの驚きだった。

「今、小春さんが住んでいる家、元は私が住んでいたのよ？　小春さんが引越してくる前に、〱仕込んで〱おくこともできたの。隠しカメラとか、ね？」

駿祐から受ける愛撫への嫌悪が薄れてしまうほど、おぞましい事実が遠のいた。自分でも顔が青ざめたのがわかるほど、血の気が引く。

「先生と二人で頑張っていたのに、子供を授からなくて気の毒に思っていたの。カレンダーに排卵日の印もつけて念入りだったのに。今日も二人で子作りに励む予定だったのでしょうか？」

（私たちをいつも気に掛けてくれたのもすべてこの為だったの……？　あんなに上品で、気さくで、綺麗で……この村の誰より信頼していたのに……）

生活の全て、性生活までも隣人に把握されていたのだ。憧れすら心の隅に芽生えていた祐貴子の本性に、小春はまるで悪魔を目の前にしたようにわなわなと恐怖と絶望に身を震わせる。

「今、〱受精期待日〱なのは小春さんだけじゃなく……」

ぺろおっ……

その仕草はまさに蛇。艶めく舌を唇に這わせた祐貴子は、未だ〱御神酒〱が効いて昏睡している大志の股間で、それだけが目覚めているように勃起したペニスに指を這

わせた。

「私は『期待日』に数日早いですけれど、この子はちようど今なんですよ？」

祐貴子が手招きすると、母や弟、小春などのやりとりをまるで人形のように黙って見詰めていた祐奈が、祐貴子との間に大志を挟む形でペタンと座り込んだ。

少女の体はか細く、色白な肌と相まって本当に人形のようにだ。十代半ばとしては発育未熟な肢体は、胸の膨らみこそはつきりしてはいるが、まだまだ乳房と言えるものではない。ブラの必要もないであろうほどだ。

腰から尻に掛けても細いが、小さいながらも尻の瑞々しくプリンとした様は、年相応の若々しい肉感を持っていた。

「私達母娘で、先生の子種、ちようだいしますわね」

「な、なにを言ってる……祐奈ちゃんはまだ子供を産めるような……」

「……私も、オットメオンナ、だから……オットメオンナの長女は、オットメオンナ……そう、決まってるから……」

ぼそぼそとした声ながら、祐奈は小春の言葉を遮った。そして、母に倣うように大志に絡みつくように体を寄せると、彼のペニスに細い指を巻きつけた。

「あ、はぁ……♡ 先生の勃起チンポ、カチカチ……♡」

小春はそのときに初めて祐奈の笑みを見た。ただ、年頃の少女の笑みと言うには、あまりに淫蕩な品のない笑みだったか。

「いやあ……お願いですからやめてください……大志さんの赤ちゃんを私以外の人がなんて……そんなのいやあ……」

言葉だけでなく、端から見てもその発情した母娘の姿は、本能的にこれは本気で孕む気があるのだということを感じさせた。

「先生の子作りは私と祐奈に任せてもらって、小春さんは……」

「小春姉ちゃんはオレと子作り！ オレ、頑張って種付けするよ！」

やたらと元気のいい声で、駿祐は自分自身を指さしてニカツと小春に笑いかける。子供を作るといふことの重大さをまるで理解していないかのような少年の能天気な様は、却かえって小春を恐怖させた。

「なっ、なにを言ってるの!! 駿祐君なんてまだ■■■■じゃない! それが子供を作るなんて、正気じゃない! それに、大志さんの子供だつてまだできないのに……!」

「二人で悩んで、よく相談してきますものねえ、見ていて辛いくらい……。先生は先生で自分に『種』がないんじゃないかと悩んで、小春さんは小春さんで自分のおなかのせいなんじゃないかと悩んで……」

未だ昏睡している大志の頬を愛しげに撫でながら、流し目に哀れみとも同情ともつかない視線を向ける。

「でも、このオムカエの儀式でそれもはつきりするでしょう。どちらかのせいなのか、どちらのせいでもないのか」

祐貴子は自らの豊満な女体をするすると大志の下半身方向へ移動させていき、頭が胸板の位置までくると、そのやや薄い唇を大志の乳首に寄せた。そして、男の乳首に艶めかしい舌を這わせ、小さな乳頭を転がす。

「オムカエの儀は、この『山神の子袋』でオットメオンナ本人かその子供と性交して、最初の『ヤマノコ』を作ること。心配しないで小春さん……オットメオンナの産んだ子は山神から賜った宝物。村がみんな育ててくれますから。だから安心して産んでくださいね」

小春の生きてきた常識からすれば信じられない言葉だった。そして同時に、駿祐が子供を作り産ませることへの不安感や罪悪感をまるで持つていなそうなことの理由がわかった気がした。

久坂親子にとって……伏隠郷の人間にとって、オットメオンナと呼ばれる女に子を産ませることは信仰の一端であり、一種の神事なのだろう。そして、子育ては村人が

全てで担う。誰か一人が責任を負い、産ませ、育てるものではないから、駿祐のような
な■■■■でさえオットメオンナに子供を産ませることになんの心配も抱いていないのだ。
「い、いやあああッ!! こんな■■■■に犯されるなんて……ッ!! 本当に狂ってる!
あなた達も、この村も!」

「小春姉ちゃんわかってないな。姉ちゃんは伏隠の人になったんだろ? だったら
伏隠のシキタリ守らないとだめじゃん」

そう言っつて、駿祐はそれまで執拗に揉み遊んでいた小春の爆乳から手を放すと、そ
の手を彼女の下半身に送った。

「ああッ!」

小春が短い悲鳴を上げた。駿祐の手は彼女の肉裂に至り、包皮を自らの勃起力で押
し退けて剥き出たクリトリスを指先でくりくりと転がすように責める。

「安心してよ小春姉ちゃん。オレがオットメオンナやっていけるようにいろいろ教え
てあげるからさ!」

「ああいやあああああつ、弄らないで、そこいやあああああつ!」

巧みに、転がすだけでなく時折激しく磨くように勃起して大きく張り詰めたクリト
リスを擦る。自分の手でもそのように扱ったことのない肉豆への刺激に、小春は大き

く悶えて体をのたうたせた。

「母ちゃん、コレ使ってみていい？」

駿祐は、小春が手足を縛りつけられている拘束台のそばに置かれた、もとは蜂蜜の入れ物だったと思しき瓶を取り、祐貴子に指し示した。

「ええ。こつちも使うから全部使わないのよ」

「わかった」

駿祐は瓶の蓋を開けると、瓶の中の白く濁った水飴のようなものを指で掬い取る。そして、それを小春の股間へと近づけた。

「いやっ!! 駿祐君なんなのそれ!!」

「なんか、気持ちよくなる薬だつて」

「伏隠に昔から伝わっている、樹液と葉草を煮詰めて作る薬ですよ。昔は、オツトメオンナを飼い慣らすために使っていたそうよ。凄い効き目ですから、ウブな小春さんにはちよつと刺激的すぎるかもしれませんが」

祐貴子は祐奈とともに大志の体の至るところを舐め回し、いよいよ股間に達しようとしていた。その傍らで息子が使おうとしている薬について一言註釈を入れながら、大志の股間にぶら下がる玉の袋をたぶたぶと揺らして愛でる。

「く、薬!? い、いや、いやあああッ! 変なもの塗らないで!

「大丈夫よ、本当に、気が狂いそうなくらい気持ちよくなるだけですから」

——ぬとおつ……。

駿祐の指にたつぷりと乗った濁った水飴のような見た目の媚薬が、まだまだ初々しい桃のような色合いをしている小春の肉唇にねつとりと塗りつけられる。

「もう濡れてるから薬どれくらい塗ってるかわかんないなこれ」

「ぬ、濡れてなんか……ッ!!」

否定の言葉を口にしようとしたが、そのときに至って自分の秘所が奥からぬめっていることを感じた。

社での神事の際、口にした御神酒を飲んでから感じていた火照り。それが今もまだ体の芯に残っていることを自覚し、小春はあの御神酒にもなにかしらの薬が盛られていたのであろうことを悟る。

大志も、社で祐貴子の猥褻な神楽を目にしながら勃起し、昏睡している今の今まで勃起し続けているのを見れば、御神酒とともに薬かなにかを飲まされたのだろうというのは想像に難くなかった。

「駿祐、母さんにも塗ってちょうだい」

ついに大志のペニスに至り、勃起した男根に舌を這わせ始めた祐貴子は、息子に向かつて雄大な牝尻を向けた。

「あーい」

蓋を開け放しの瓶から、もう一方の手で媚薬を掬い取り、駿祐は母の淫裂に指をやった。そして慣れた手つきで祐貴子の肉付きよい熟れた女陰に媚薬を塗りつける。「んー、母ちゃんより綺麗な色と形してるよなー、小春姉ちゃんのマ○コ。祐奈姉と いい勝負かな。セックスしたらどれが一番だろ、母ちゃんかな？」

「女を比べるなんて生意気なことして……」

小春と祐貴子、二つの牝穴に伏隠伝統の媚薬を塗り込みながら、駿祐は自分の指に絡みつくような様相の違う女二人の陰唇の様子を見つつそんな感想を漏らした。

実際小春の女陰は、より年若い祐奈と比べても、成熟した肉の付き具合こそあるが色と形ではまったく見劣りしないものであった。自慰経験もさほどなく、男性経験も夫である大志一人だけであることからすれば、そのくすみなく美しい花びらのような女性器であるのも当然であった。

祐貴子とて女陰の形は整っているし、薔薇を思わせる濃い色合いの陰唇はそれこそ華のようで綺麗なものだ。とてもオットメオンナなる存在として、子を作る務めのた

め、村の男達と数知れずセックスを重ねてきただろうとは思えないほどなのだが。

(母子や姉弟でアソコを知ってる……まさか家族と……!?! 狂ってるわ……!)

駿祐の指は小春の膣内にまで入り、膣壁の隅々まで媚薬を擦り込むように丹念に指を動かす。時折指を抜いて、小陰唇から大陰唇、クリトリスまでも丁寧に刺激して、小春の女性器全てをくまなく刺激していく。その手練は、とても少年とは思えないほど女のツボを心得たものだった。

「気持ちいいだろ小春姉ちゃん。マ○コが、ギュッってオレの指握ってくるぜ」

「好きで締めてるわけじゃないの……ッ!」

とはいっても、それが媚薬の効果なのか、体は刺激を快感と受け止めて著しく反応を見せていた。女陰からはまさに溢れるようにして肉汁が湧き、駿祐の指使いに合わせてぬちゃぬちゃと粘着いた音を立てる。胸の先端に向かって尖っていくずんぐりとした砲弾のような豊乳は、乳首が軽い痛みすら感じるほど硬くしこって疼いていた。「んん……ありがとう駿祐、奥までヌルヌルだわ」

上気した顔で祐貴子は尻を揺すり、体を起こした。女なら誰もがうらやむような肌艶。三十代も半ば過ぎであろう年の頃とは思えない、肌理きめの細かさと同張りを持った色白な肌だ。

「祐奈が先にする？ お母さんは先生が目を覚ましてからシたいから」

「うん、うん、ああ、はやく、はやくハメたいよオ、先生のチンポオ。もうオマ○コ濡れ濡れでふやけちゃうよオ」

普段の無口さが嘘のように、祐奈は饒舌だった。大志のペニスに祐貴子を押し退け、そんな勢いでしゃぶりつき、涎にまみれた口元に淫毛を張りつかせた様は完全に淫乱の態だ。

「それじゃあ小春さん、お先に子作り始めさせていただきますね」

「そ、そんなつ、そんな、正気なんですか!? 本当に、本当に親子で一緒に妊娠するつもりで……!!」

「ええ♡」

につこりと満面の笑みで、半ば青ざめて問い質す小春に返す祐貴子。その横で、彼女の娘は今まさに大志の上に跨がり、母娘の唾液で全体がトロトロに濡れた男根を、自らの無毛なために未成熟な感のあるワレメにあてがっていた。

「やめてえええええええッ!!」

たまらず声を張り上げる。声は山神の子袋と称される窟の中で、当の小春ですら耳がキンと鳴るほどに響く。

「うー……ううん……」

耳をつんざかんばかりの絶叫が呼び起こしたか、これまで散々ペニスへ刺激を加えられても昏睡していた大志がうつすらと目を開けた。そして、自分を目覚めさせた妻を探しているのか視線を泳がせる。

「あら……お目覚めですか先生」

大志の視界に最初に入ったのは妻ではなかった。隣家の人妻で大家、診療所でいつも頼りにしている看護婦、そして仕事の最中にもあまりの妖艶さに時々生唾を飲んでしまうことすらある美女、祐貴子であった。

「久坂さん……ここは……？ 小春の声が……した、気がしたんですが……」

「大志さん！ 私はここ、ここです！」

「小春……小春!? な、なんだこれ!？」

寝惚け眼だった大志が目を見開く。傍らには一糸も纏わず体を密着させる祐貴子。祐貴子を挟んだ向こう側には、陸上のハードルのようなものにあられもない格好で拘束されている妻と、妻の陰部をまさぐる少年。そして、自分は大の字に拘束され手足に自由はなく、身動きの取れない自らの上に跨がった発育途上の少女。

「あああ♡ お目覚め即逆レイプ——っ♡」

困惑する大志の視線が自分に向いた瞬間、淫蕩な笑みを浮かべた祐奈は一気に細い腰を落とし、大志のペニスで自らの牝穴を貫いた。

——ぐぢゅつぶッ！

滴となって糸を引きながら落ちるほど濡れた少女の小穴は、人並みの大きさはある大志のペニスに押し広げられ、蜂蜜を棒でつくような音を立てて発情汁を迸らせる。

「う、うああああッ!! ゆ、祐奈ちゃんなのか!？」

「はい♡ ねえ先生？ お目覚めと同時に逆レイプされる気分はいかがですか♡」
大志に跨って祐奈は細い体をリズミカルに上下させる。体格に見合って作りの小さい牝穴は、啜え込んだペニスの出入りに合わせて吸いつくように陰唇が纏わりつく。

「あ、ああ、あ、あ……!! 大志さんっ……大志さんっ……!!」

夫が自分より半分ほど年下の少女に犯されている様を見せられ、小春は涙を落としながら言葉らしい言葉も出せず、その間も続く駿祐の指戯にびくんびくんと女体を反応させるばかりだった。

「よおし小春姉ちゃん、オレ達も子作り始めよ♡」

にゆるう、と抜かれた指との間にたっぷり糸が引くほど、小春の牝穴は解れていた。媚薬のせいもあつてなのか、ヒクヒクとクリトリスと肉びらをひくつかせ、充血した

それらはぼつてりと厚みや大きさを増していた。

「い、や……やめて……やめて……お願いだから……」

「小春姉ちゃんがつ越してきた日、一目惚れしちゃったんだオレ。そんなときからオレの初めての本気子作りすんのは姉ちゃんだつて決めてたんだ♡」

「ひい……ッ!？」

指戯を完了した駿祐が膝立ちに体を起こし、自らの股間で痛々しいほど上向いて勃起した少年男根を小春の前にさらけ出す。

駿祐のペニスは、まるで鎌首をもたげた蛇のようだった。太さも同年代の少年に比べれば太いのだろうが、大人と比べればやや細いだろう。しかし、その長さは大人のそれを確実に上回っている。小春にとってしてみれば、比較できる唯一のペニスは志のものなのだが、彼のペニスよりも一・五倍も長いのではないだろうか。二十センチはあろうかという風に見える。

駿祐の長いペニスは、その長さの賜物か包皮は完全に剥けて、すもものような色合いの亀頭を露出させている。鈴口から我慢した証しの汁をトロリと滴らせ、まるで獲物を前に涎を垂らす獣のようだ。

「いくぞ小春姉ちゃん」

「いやああああ——ッ！ 大志さん助けてえッ！ 私こんなのいやああああッ！ 大志さん以外の人の子供なんてイヤなのがいいッ!!」

「こ、小春ッ、小春——ッ！ やめてくれ久坂さん！ いったいどうしてこんなこと?! うう、ああッ！」

「先生、奥さんのことは駿祐に任せて、祐奈との子作りに集中してください。祐奈、ずつとずつと孕みたかったけど、村の男の子からお爺ちゃんまで誰とシてもデキなかつたんです。でも、今までシたことない先生とならもしかしてって、期待してるんですから♡」

祐奈は扇情的に腰をくねらせ、膣肉にペニスを舐め回させるかのような腰使いを見せる。若々しい牝肉は男根にびつちりと吸いつき、もともと狭い穴のきつさと、収縮する肉とで大志の射精スイッチを強烈に刺激する。

「どうですかこの動き♡ 気持ちいいですか♡ 射精しなくなったらいつでも祐奈の○学生ヤリマン穴に種汁ピュッピュッしてださい♡ イク時は、祐奈が妊娠できるように、孕め♡ 孕め♡ つて思いながら種付けしてださいね♡」

円運動の腰使いから一転、まるで大志の射精欲の昂りを感じ取っているかのように、トドメを刺すような小刻みで速い縦の腰使いに変化する。

薬の盛られた御神酒と、昏睡の間にも受け続けた刺激に大志の射精欲は高いところまで上り詰めていた。祐奈の高速騎乗位ピストンは彼の射精ボルテージを確実に上昇させ、限界へと追い込んでいく。

姉が大志を犯しているその傍ら、駿祐は他にまったく目もくれず、ただ小春を我がものにすることに集中していた。

出会いから一年、溜めに溜めた劣情を乗せて、長いペニスの先端を小春の入り口に押し当てた駿祐は、一気に腰を突き出した。

「小春姉ちゃんにッ……入ったッ！」

——にゅぷぷぷぷッ！

長さに対して太さは特筆するほどのものではない少年男根は、丹念に解かれて奥の奥まで溶けた若妻の膈内の最深部へ容易く入り込んだ。

(ッ!! 奥にッ、当たるッ!!)

ペニスの先端が膈の奥にズボンと届き、亀頭が子宮口を擦る。小春は大志とのセックスで経験したことのない新しい刺激に目を白黒させた。同時に、それが痛みや苦痛ではなく快感を発していることがあまりに恐ろしく気が狂いそうだった。

「いやああああああ……ッ! ああああいやああああッ、入って、入ってる

ううう！ 奥まで来てるのイヤああああ——ッ！」

駿祐の突入を受けた小春の叫びが響くと、大志はびくつと体を震わせた。傍らで妻が少年に犯されている。それを止める手立てもなく、自らも少女に逆レイプを受けるぞまだ。

屈辱と情けなさと、そして少女の淫乱な穴が強烈かつ一方的に押しつけてくる快感。様々な感情と刺激が大志の押し止められていた射精ボルテージを限界に至らしめた。

「ああ、小春ッ！ 小春ッ！ ううっ、ごめん！ ごめん小春！ 小春——ッ！」

「出して出して出して先生♡ 早く早く早く♡ 祐奈の淫乱ドスケベJCM◯コに先生の種汁たつくさんぶち込んで♡ 祐奈妊娠したあい♡」

極めて小刻みなストロークで大志のペニスを責めていた祐奈は、大志が射精に達すると見極めるや、ペニスが抜けるギリギリまで腰を上げた後、ハンマーを振り下ろすように強烈に腰を打ち下ろし、狭い膣内の最も深いところまで大人男根を突き刺した。

——どつぶびゆるるるるううう——ッ！

ズンと少女の膣奥の壁に突き当たったまさにその瞬間、大志の男根がしゃくり上げ、膣内に精液を吐き出す。力強く噴き出す精液は、こぢんまりとした膣内と子宮を瞬く間に満たして、二人の結合部からぶちゅぶちゅと溢れ出る。

「あらあら、凄いわ先生、こんなにたくさん射精なさって……すぐ傍で奥さんがレイプされてるのが昂奮したのかしら？ ふふふ……」

娘が隣人の夫を逆レイプする様を手淫しながら觀賞していた祐貴子は、黒縁眼鏡の奥でうっとりとした瞳で大志を見詰め、蛇のような艶めかしく妖しい笑みを以て彼の罪悪感と情けなさを責め立てた。

「んんふうう……先生の射精すごくパワフルでした♡ 本当に、子宮に浴びせ掛けられて祐奈もイッチやいましたア……♡」

射精が完全に終わるまでビクンビクンと絶頂に体を震わせながら、ぴったりと大志のペニスの付け根まで牝穴に咥え込んでいた祐奈が、尻をゆつくりと上げる。

——ぐぢゆるるる……。

ぬぼ、とペニスが抜けるや、祐奈の小さな穴から音を立ててスペルマが零れ出た。

「こんなにたくさん射精してくれて、ありがとうございます、先生♡ 今まで一度も妊娠できなかったけど、先生の子種なら今度こそ妊娠できそうな気がします♡」

垂れ落ちるスペルマをもったいなさそうに指で掬い取ると、それを自らの体に塗って恍惚の貌を見せる少女。そんな我が娘を見やり、祐貴子はさも楽しげに口元を弛ませた。

「くっはああああ…… 小春姉ちゃんのマ○コぬるぬるであつたけえ♡」

大志が母娘に逆レイプ種付けを強いられている傍ら、小春をついに犯した駿祐は、感慨深そうに彼女の膣内の感触を味わい、ゾクゾクツと背筋を快感に震わせていた。

ややしばらくペニスを最深部に差し込んだまま味わいを嘔み締めた後、いきなり全力でピストンを開始した。

——パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンツ!!

大きく脚を持ち上げた開脚状態で拘束された小春は半ば、マングリ返しで寝ているようなものだ。駿祐は女性器を上向かせるように横たわっている小春の腰の上に乗るようにして、打ち下ろすような高速ピストンを繰り返す。

「んひいいいいいいんツ!! いいいやあああああいやあああああッ!」

小春の知らないセックスだった。自分よりも小さな体躯の駿祐に、体格差で勝るにもかかわらず一方的に貪られる屈辱。彼女が覆い被されれば体が隠れてしまうだろう小柄な少年の、体格不相応に力強く獣じみた、牡が牝を屈伏させるための腰使い。長いペニスが、膣の最深部から膣口まで余すことなく擦る。媚薬がそうさせるのか、屈伏感と肉体的な刺激とが、ビリビリと静電気が走っているような快感となつて奔出する。「うおお——っ! 小春姉ちゃん! 小春姉ちゃん! 絶対、オレのモノにするッ、

オレのオンナにするッ！ オレの子供産めッ！」

「やめてくれえ……頼む、小春は見逃してくれ……オレはどうされても、なんでもするから……」

大志は耳を塞ぐこともできず、ただボロボロと涙を流しながら、顔を背けて妻が少年に犯される様を見まいとしていた。

「あらあ……先生つたら子供みたいに泣いちゃって可愛いわあ……」

ニマア、と凶悪さすらも滲み出るような美しくも恐ろしい笑みを浮かべる祐貴子。

「可愛い先生を見ていたら、私、たまらなくなるじゃありませんか♡」

蛇のように舌なめずりすると、一戦終えて横に退いた娘に代わり、祐貴子は立ち上がって大志の腰の上を跨いだ。

拘束されて仰向けになっている大志からは、祐貴子の黒々と濃密な陰毛に彩られた脚の付け根一帯が全て見て取れた。さらに、目を見張るほど大きく、その重さゆえか重力に引かれてやや縦に長い形をしている猥褻な垂れ爆乳が、迫力のある煽りの構図で目に飛び込む。

「さあ先生、次は私と子作りしてくださいな」

ゆっくりしやがみ込んでいき、牛馬を思わせる重量感のある肉付きたっぷりとした

尻を、一度射精してもなお硬く反り返っているペニスの直上に位置させる。

「オレには小春が居るんだ……オレの子供は、小春に産んで欲しいんだ……」

「残念でしたわねえ……」

娘の肉汁と大志の精液とでどろどろになっているペニスを、自らのよく濡れた熟牝穴にあてがうと、祐貴子は殊更ゆっくりと挿入していく。

「先生はお気付きでしょう？ 私が生十人の子供をこの村で産んでいること。診療所には私の妊婦検診のカルテがありますから、目につきましたでしょう？」

ペニスは根本まで容易く飲み込まれ、のしいっ、と肉厚で柔らかい巨尻が大志の腰に乗る。

「この数年はぱったりと妊娠しなくなつて……たくさん産みましたから、もしかしたら私はもう孕めないのかもしれないかもしれません」

祐貴子が蹲踞そんきょの姿勢で膝のバネを使い、リズミカルに体を上下させ始めると、肉質柔らかい尻が大志の腰との間で肌を打ち鳴らす。上半身ではみぞおちまで隠さんばかりの豊乳がぶるんぶるんと暴れ、彼女自身の肌とぶつかってペタペタと音を伴って揺れていた。

「祐奈もこれまで妊娠できないできましたし……でも、二人で種付けを受ければ、先

生の子供ができる確率はずっと高くなりますから。私と祐奈どちらか、あるいは両方、先生の精子を受精するよう、期待して種付けなさってくださいね♡」

軽やかだった祐奈の腰使いとは対照的に、ガツガツと貪るように打ち込む祐貴子の腰使い。

穴の狭さゆえにギチギチときつい祐奈の牝穴とは違い、柔らかく、熱く蕩けるように熟れた膣肉が、ギュウツと締まって絞り上げる。

「ううああああ……!!」

それだけではない、膣の肉壁はまるで何十何百と襞が折り重なっているかのようであった。祐貴子が動き、ペニスと膣肉と擦れると、ニユルニユルと無数の細かい襞が龟头に絡みつく。淫淑女の膣内は、感触も快感も少女のものとは別格だった。

——ビュツッ! ビュルルツッ!

時間にすれば三分にも満たなかっただろう。本格的な射精と言うほどのものではないが、大志の腰がビクビクと痙攣して、まるで漏らしたように少量の精液を祐貴子の胎内に飛ばした。

「あら先生、ちょっと漏れてしまいましたか?」

膣内に感じた熱い感触に、猥らに豊満な肢体を揺する黒髪の美人は心地よさそうに

目を細める。そして、それまでの蹲踞からの屈伸ピストンに変え、大志の腰の上に跨がって座り、股間を擦りつけるように腰を前後に艶めかしくくねらせ、ペニスへの刺激を変化させた。

「何回でもイカせて差し上げますからね……遠慮なく射精してください」

よどみなく滑らかな腰のくねり。膣内の襞が波打つようにしてペニスに纏わりつき、大志を苦ししいまでの快感で悶絶させた。

「ああ……大志さん……！　たい、しさつ、うッ、ぐ、んッ、う、ううっ！」

少女に逆レイプされ射精し、今度は美熟女によって犯されている夫。女による輪姦を受けている大志を横目に見ながら、小春はもはや表情も目も半ば虚ろになっていた。涙はただ流れるに任せ、口からは駿祐が突き込むごとに呻くようなくぐもった吐息を吐き、ピストンの振動で頭はカクンカクンと糸の切れた人形のように揺れている。

「なあ小春姉ちゃん気持ちいいか？　オレのチンポ気持ちいい？」

パンパンと腰を打ちつけながら、駿祐は小春に問い掛ける。少年の長いペニスは、小春にとつて不本意ながら確実に快感のツボを刺激していた。深いところを小刻みなピストンで擦り上げるなどは、特に小春にとつて無慈悲な快感となつて襲っていた。

「もう許してえええ……！　もう動かさないで、お願いだからあ……！」

弱々しい、悲鳴というほどの声量もなく、ほとんど懇願といった声。

「そんなこと言ったって、小春姉ちゃんとやるセックス、超気持ちよくて腰止まさないよ！」

媚薬が増幅する快感は小春の体を否応なく反応させ、彼女の意思とは関係なく少年のペニスを膾肉が食い締めた。自らの意思ではどうしようもない女体の本能的な官能が、小春自身を苦しめる。

「もう絶対放さないからな！ 小春姉ちゃんはオレのものだぞ！ いいか!？」

ピストンを始めてからまるで衰えない勢いを維持している腰。その動きを緩めないまま、駿祐は小春の虚ろになって半開きの唇にむしゃぶりつくようにキスをする。

「んんうううううーッ!？」

セックス以外の刺激が、虚ろに沈んだ小春の意識をはっきりとしたところへと引き起こす。少年に吸いつかれながら、同時に絶えず強制入力され続ける快感。虚ろになることで遮断していた官能が、引き起こされた意識へと押し入り、小春はビクンビクンと大きく体を戦慄わななかせた。

（ああ、ダメ、ダメ！ イッチャだめ！ イキたくない！ イキたくないのにッ！）
媚薬によって無理矢理に火を着けられ、少年のペニスによって大きくなった非情な

「つくううううう——ッ！ 孕ませるッ！ 孕ませるッ！ 絶対孕ませるッ！」
射精しながらも、駿祐の腰は止まらなかつた。

——つどびゆるるるッ！ つぶびゆるるるッ！ びゅつるうッ！ びゅつるうッ！
腰が一番突き上げられるタイミングに合わせて力強くペニスがしゃくり上げ、射貫かんばかりに噴き上げる射精で排卵日の子宮に向けて子種を飛ばす。

（ああ、精液がどんどんおなかの奥に溜まって……私、もう……）

己が精子で孕ませようという意欲に満ちた、亀頭を膣内奥深く押し込んでの種付け。子宮内に染みるような精液の熱さは火の如く、侵略するように官能として全身へと広がっていく。

小春は目を見開き、受精の恐怖に顔を引き攣らせる。同時に膣内を襲う射精の衝撃は、彼女の牝本能に油を注ぎ、官能をアクメへと燃焼させた。

彼女の意思とは関係なく、生物として、雌性としての肉体が、子孫を残すチャンスを得た喜びを本能的に快感へと変換し、折り重なるように絶頂を膨らませていく。

「ああああいやあああああアツちゃあうううう！！ ごめんなさい大志さんごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！ ンんんんいいいいいぐううう——ッ！！」

精液が結合部から溢れ出しても、種付けをする駿祐の勢いは止まらない。執拗なま



でに射精を続けながら、種汁で満ちた膈内を攪拌するようになお長いペニスを抜いては挿し、やがて結合部でブヂュルグヂュルと泡立ったスペルマが酷い音を立てる。膈内に満ちた精液がペニスのさらなる往復運動に合わせて子宮に押し込まれ、こつてりと濃厚な種汁が流動するのが感じられそうなほどに渦巻く。

「ひ………ッ！ んっ、ひいひい………ッ！」

流動する精液が胎内を刺激し、すでに絶頂の最中にあるにもかかわらず一層快感を深める。火山が噴火するようなどてつもなく巨大な絶頂が、駄目押しとばかりに押し寄せ、意識を吹き飛ばしていく快悦に、拘束された女体が激しく痙攣する。

(イクのが収まらない………！ 私、おかしくなってしまったの………?)

思考を真っ白く消し飛ばす鮮烈なアクメに襲われ、彼女にはこれまでに味わったことのないこの強烈な快感こそが受胎の先触れに感じられた。

膈から子宮までを満たしている濃厚な精液の中から、排卵間もない新鮮な卵子は活きの良い精子を受精し、受精卵はやがて着床して妊娠を成立させるだろう。

絶頂に半ば意識を飛ばされながら、小春は自分が間違いなく孕んでしまうことを本能的に悟った。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>